

## 接続詞における対人的意味の獲得—サレバを事例として—

川村祐斗（愛知淑徳大学）

### 1. はじめに

近年、歴史語用論などの観点から、副詞が対人的意味（呼びかけ・応答等）を持つ感動詞に変化する現象が注目されるようになってきた。たとえば、「なんと」「ちょっと」の呼びかけの感動詞への変化を扱った深津(2018a, 2018b), 「どうも」の対人的使用や「どうぞ」の感動詞の使用に着目した川瀬(2019, 2024), 「まことに」「いかにも」「なかなか」の応答型感動詞用法の例について記述した林(2018) などがある。一方、いわゆる接続詞<sup>1</sup>が対人的意味を持つ表現に変化する歴史については、サラバやサヨウナラの“別れの挨拶語”化を扱った研究（川村 2021, 2024 等）を除けば、あまり見られない。前件・後件をつなぐ働きを持つ接続詞が、そのような統語的特徴を喪失した表現へとどのように変化するのかについては、事例研究を積み重ね、変化の特徴を明らかにしていく余地がある。そこで本発表では、対人的意味を獲得するとされるサレバを事例として、いわゆる接続詞が対人的意味を持つ表現に変化する過程を観察する。

### 2. 問題の所在

サレバはもともと、先行する事態の当然の帰結として後続する事態が起こることを示す、順接確定条件を表していた(1)。

- (1) 歌の返し、箱に入れて、返す。(略)とぞありける。されば、帰りいましにけり。  
(竹取物語, 10世紀初期頃, 新編日本古典文学全集(以下, 新全集) 12p.42, 20-竹取 0900\_00001, 79270)

しかし、時代が下ると、対人的に使われるサレバが一定数見えるようになる(2)。『日本国語大辞典第二版』(以下, 日国)の「されば」の項目では「相手のことばが思うつぼにはまった時, 受けて答える語。さよう。いや。そのことだ。」と説明される。

- (2) (大名)「(略)おもしろひ所へいてなぐさミたひが, どこがようあらふずるぞ(太郎冠者)「されハ都の事にてござ有る程に, おもしろひ所ハさまノ\ござあらふずる, (虎明本狂言, 萩大名, 1642年写, 翻刻註解上 p.313, 40-虎明 1642\_02029, 2220)

順接確定条件のサレバは、必ずしも相手の発話内の要素を受ける必要がない。一方、対人的意味を表すサレバは、相手の発話を受けることが必須であり、順接確定条件とは一線を画す。順接確定条件を表していたサレバは、どのように対人的意味を獲得したのだろうか。この種のサレバについては岡崎(2015)でも触れられているが、サレバの歴史全体を扱った研究であり、対人的意味の詳細な獲得過程は不明である。そこで本発表では、サレバの歴史を観察し、対人的意味の獲得過程を明らかにする。

### 3. 対人的意味を獲得する時期とその特徴

<sup>1</sup>ここでは「単に語が連続しているだけで、一語として認められない(1つの品詞として位置付けられない)もの」も含め、前後の文脈をつなぐ表現を広く「接続詞」として扱っている。

まず、対人的意味を表すサレバの特徴について整理する。岡崎(2015)によれば、聞き手を指向したサレバは、中世末期以降増加するとされる。また、いわゆる接続詞としての用法を喪失したことが窺える指標の1つに、前件・後件が存在しない単独での使用が挙げられるが、サレバが単独で使用されるようになるのは17世紀半ば以降である(3) (サレバヨ、サレバコソの形で単独使用される例は除く)。

- (3) ▲おな のふとつさま。のふはぢしらずがきました。▲おや さればいやい ▲むこはい。おんなどものこゑがする。(狂言記、巻第一18ウ、1660年、北原・大倉1983p.129)

この点から、サレバは中世末期～近世初期に対人的意味を獲得したのではないかと考える。

対人的意味のサレバは発話冒頭でよく使用されると予想される。そこで16世紀末から17世紀半ば頃の、発話冒頭のサレバの例をいくつか見てみると、大きく相手が提示した疑問に応答するタイプ(2)(4)や、相手の発話内容に同意するタイプ(5)等があることがわかる。

- (4) 「さても、拜殿にての御作の詩は御自作にて候か。又いにしへもかかる詩の侍りける事にて候か」と申ければ、「されば、いにしへよりありし事なり。(一休ばなし、巻之四、1663年、新全集64p.331)

- (5) (孫二)「(略)此間ハお目にかゝらなんだ(孫一)「されハ此間ハおめにかゝらなんだ(虎明本狂言、薬水、1642年写、翻刻註解上p.105、40-虎明1642\_01021,3580)

この頃の発話冒頭におけるサレバの多くは、相手の疑問に応じたり相手に同意したりすることで、その話題を受け入れていることを相手に知らせる働きを持つと考える<sup>2</sup>。

以下、サレバがこのような働きをどのようにして獲得していくのかを見ていく。

#### 4. 調査方法

本発表ではサレバの用例を観察し、対人的意味の獲得過程を調査する。いわゆる本文種別(発話・地の文・その他・不明)と発話中の出現位置(冒頭、途中、末、単独)を指標とし、対人的意味のサレバが現れやすい発話冒頭を中心に論じる。

適宜サレバがどのようなタイプの発話を受けるのかにも言及する。その際、16世紀末から17世紀半ば頃に多く見られる疑問応答タイプと同意タイプを典型例と見なす。解釈による判断の影響を少なくするため、同意タイプは(5)のような「サレバの後続発話が相手の発話と同じ内容のもの」とする。

調査平安期から17世紀半ば頃までとする<sup>3</sup>。資料は新全集等を使用し、『日本語歴史コーパス』(以下、CHJ)収録作品は「コーパス検索アプリケーション『中納言』」(<https://chunago>

<sup>2</sup> 発話冒頭のうち「相手の話題を受け入れる」という特徴に合致しない例も見える。(ア)は対人的に使用されているが、何度も同じことを言う相手に反発している点で、(4)(5)等とは性質が異なる。詳細な検討は本発表では行わない。

(ア) (髯)「なふそれをくハふ(妻)「それとハなんでござるぞ(髯)「なふいかうむまつた、はやうこしらへてくれさしめ(妻)「いやなんでござる(髯)「いやわごりよがしやうをしつた程に、させてくへといハれた、はやうこしらへさしめ(妻)「されハなんでござるぞぞんぜぬ、名を仰られひ(虎明本狂言、岡太夫、1642年写、翻刻註解上p.375、40-虎明1642\_03006,13580)

<sup>3</sup> コ(レ)ハサレバ、サレバコ(レ)ハ、サレバコソ(已然形終止を伴うか否かを問わない)、サレバトテ、サレバトヨは調査対象から除く。漢字表記され、読みが特定できない例も(サレバの形態論情報が付与されていても)除外する。

n.ninjal.ac.jp/) で検索した<sup>4</sup>。

CHJ の場合、本文種別は原則、形態論情報に従うが、情報が付与されていない場合や、テキスト内容に合わない場合は適宜、情報を追加・修正した。CHJ 以外の作品も同様に情報を付与した。「地の文」には「割書き」「引用-評」等も含む。「その他」は「心内、手紙、和歌」等とし、発話で心内表現を引用する場合もこれに含める。また、鍵括弧 (「」) 直後にサレバが書かれていても、同一話者の発話が前から続いている場合は「発話途中」に数えた。

## 5. 調査結果

サレバの本文種別および発話における出現位置について調査した結果を作品ごとにまとめた (表 1)。表 1 から、サレバは平安期の時点で発話の例が多く (91 例中 56 例)、次いで地の文の例が多いことが看取される (29 例)<sup>5</sup>。

また、発話の中では冒頭より、発話途中での使用が目立つ (56 例中 53 例)。平安期のサレバは前件・後件が明示される位置 (発話途中や地の文) に出現しやすかったことがわかる。このことは、サレバの順接確定条件としての性質を表していると言える。

一方、平安期の発話冒頭の例は 3 例のみである。『落窪物語』の例(6)は、少将と契りを結んだことを北の方に非難されると恐れる姫君に対し、あこぎが邸を離れることを提案する場面である。あこぎは姫君の発話を受け入れてはいるものの、疑問への応答や同意といった対人的意味の典型例ではない。また、サレバ以下の発話は相手の発話を根拠とした提案であり、前件を根拠とする順接確定条件の用法での解釈も可能である。

(6) (姫君)「(略) 北の方いかにのたまはむ。(北の方)『わが言はざらむ人のことをだにしたらば、ここにも置いたらじ』とのたまひしものを」とて、〔姫君が北ノ方ヲ〕<いみじ>と思ひたまへれば、(あこぎ)「されば、なかなか思ひ離れたてまつりたらむが、よからむ。(落窪物語、10 世紀後半、新全集 17p.45, 20-落窪 0986\_00001, 101860)

(7)は息子の顕信が出家したことを受け、道長が僧正 (僧官の最高位) を与えると発言する場面である。サレバが用いられる発話は伝聞 (引用) された内容であり、実際にどのような状況で発話されたのか (疑問を受けるのか相手に同意しているのか) は不明である。

(7) (世次) …殿の御ためにもまた、法師なる御子のおはしまさぬが口惜しく、こと欠けさせたまへるやうなるに、〔藤原顕信が出家シタノヲ〕 (藤原道長)「されば、やがて一度に僧正になしたてまつらむ」となむ仰せられけるとぞうけたまはるを、… (大鏡、1100 年頃、新全集 34p.303, 20-大鏡 1100\_02009,36510)

<sup>4</sup> 検索キーは「キー:(語彙素="然る" AND 語彙素読み="サル" AND 活用形 LIKE "已然形%")AND 後方共起: 語彙素="ば" ON 1 WORDS FROM キー」「キー: 語彙素="されば"」である。明らかにサレバと異なる例は除外した。

<sup>5</sup> ただし、発話 56 例中 46 例が大鏡の例である点は注意を要する。大鏡は公宅世次や夏山繁樹、侍らの対話形式で物語が進行するため、地の文相当の部分が世次らの発話で構成されている。CHJ で世次らの発話に「会話」の情報が付与されている、他作品の「会話」とは性質が異なると言える。世次らの発話 (41 例、すべて発話途中) を例外とする、純粋な発話と言える例は 56 例中 15 例となる。蜻蛉日記以前に発話の例が見られない点も考慮すれば、平安期のサレバはそもそも地の文と比べ発話で使用されにくかったと言える。

表1)サレバの本文種別と発話における出現位置

		発話				小計	地の文	その他	不明	総計
		冒頭	途中	末	単独					
平安	竹取物語						1			1
	伊勢物語						3			3
	土佐日記						1			1
	大和物語						4			4
	平中物語						10			10
	蜻蛉日記						4	1		5
	落窪物語	1	2			3	2	1		6
	枕草子							2		2
	源氏物語			6		6	1			7
	讃岐典侍日記	1				1	3			4
	大鏡	1	45			46		2		48
小計	3	53			56	29	6		91	
鎌倉	方丈記						1			1
	住吉物語		1			1				1
	宇治拾遺物語	1	18			19	20	1		40
	保元物語	1	13			14	11			25
	建礼門院右京大夫集						1	2		3
	平治物語		2			2	1			3
	十訓抄						10			10
	平家物語	1	26			27	45	2	4	78
	十六夜日記							1		1
	とはずがたり		4			4		5	1	10
	徒然草		2			2	16			18
小計	3	66			69	105	11	5	190	
室町	義経記	1	11			12	11		2	25
	天草版平家物語	5	10			15	1			16
	天草版伊曾保物語	1	1			2				2
	虎明本狂言集	34	12	1		45				47
	小計	41	34	1		76	12		2	90
江戸	狂言記	32	2		2	36				36
	かなめいし		1			1	1			2
	一休ばなし	5	1			6	6			12
	浮世物語		11			11	2			13
	小計	37	15		2	54	9			63
総計	84	168	1	2	255	155	17	7	434	

(8)は死期を悟った堀川天皇が、死ぬ前にすべきことを白河院に伝えるよう忠実に頼んだ後、白河院のもとから戻った忠実の報告の場面である。サレバは、堀川天皇の考える「死ぬ前にすべきこと」への同意を示しているとも解釈できる。しかし、(7)同様、伝聞(引用)された内容であり、実際の発話状況は不明である。

- (8) 帰り参らせたまひて、(藤原忠実→堀川天皇)「(白河院)『されば。去年一昨年の御ことにも、さるさたにはさぶらひしかど、宮の御年のをさなくおはしますによりて、今日までさぶらふにこそ』となんはべる」と奏せらるるにぞ、(讃岐典侍日記、1110年頃、新全集 26p.395、20-讃岐 1110\_00001,17470)

平安期の全サレバに占める発話、および発話冒頭の割合の少なさを踏まえ、(6)~(8)は対

人的意味を持つサレバではなかったと見ておく。

鎌倉期も地の文が多く(190例中105例)、発話がそれに次ぐ(69例)。発話途中の例も69例中65例と多数である。一方、発話冒頭は3例と少なく、うち1例は別本でサラバとなっており(川村2024:7)、サレバの確例とは言えない。

残り2例のうち(9)は、「なぜ食事の準備が遅いのか」と国守が言ったのを受け、調理人が「まだ羊を殺すな」と国守の妻に言われた旨を伝える場面である。サレバは国守の疑問に対して応答する形で使用されており、順接確定条件の解釈も成り立たない。

- (9) (妻)「しばし、この羊な殺しそ。殿帰りおはしての後に、案内申して許さんずるぞ」といふに、守殿、物より帰りて、「など人々参物は遅き」とてむつかる。(調理人)「されば、この羊を調じ侍りてよそはんとするに、うへの御前、『しばし、な殺しそ。殿に申して許さん』とて、とどめ給へば」(宇治拾遺物語、13世紀前半、新全集50p.411, 30-宇治1220\_13007,5260)

(10)は阿波の内侍の発言を受けた法皇が「お前は阿波の内侍であるのだな」と返す場面である。サレバの後続には相手の発話内容の一部の繰り返されており(波線部)、同意の対人的意味を表すサレバの特徴に合致する。ただし、サレバ以下の発話は相手の発話を根拠として「そう言うということは、～なのだな」と順接確定条件として解釈する余地も残る。

- (10) 「(略) 阿波の内侍と申しし者にてさぶらふなり。母は紀伊の二位、さしも御いとほしみふかうこそさぶらひしに、御覧じ忘れさせ給ふにつけても、身のおとろへぬる程も思ひ知られて、今更せんかたなうこそおぼえさぶらへ」とて、袖をかほにおしあてて、しのびあへぬ様、目もあてられず。法皇も、「されば汝は、阿波の内侍にこそあんなれ。(平家物語、13世紀頃、新全集p.513, 30-平家1250\_13003,16330)

以上、鎌倉期は発話の用例も増加し、対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が見られるようになる時期である。

室町期には発話76例が地の文12例を上回る。また、発話の中でも冒頭41例が途中34例より多くなる(特に狂言では発話冒頭に大きく偏る)。発話冒頭のサレバ41例のうち、疑問応答タイプが24例(2)(11)、同意タイプが6例である(5)(12)。

- (11) 右馬。木曾が京で狼藉をしたは何たる事ぞ?喜。さればその事で御座る〔Sareba fonocotode gozaru〕。京中には源氏の勢が満ち満ちて、(略)狼藉をして御座る。(天草版平家物語、巻3第13、大英図書館蔵本p.219, 40-天平1592\_03013, 870)

- (12) 「下六ハおそひな(藤六)「されハおそござるが、も参らふ(虎明本狂言、麻生、1642写、翻刻註解上p.165, 40-虎明1642\_02001,20990)

江戸期は資料の偏りがあることは考慮する必要があるが、全体として地の文9例より発話54例が多い。また、発話54例の中でも冒頭37例が途中15例を上回り、単独2例も見られる(3)(13)。発話冒頭37例のうち疑問応答タイプ30例(4)(14)、同意タイプ3例(15)である。

- (13) ▲おは(略)めでたいおしゆくらうが。あつたによつて。はつ酒を。おましたわいの ▲おい はあ。それや。めでたう御ざります ▲おは さればいの(狂言記、巻第二12オ、1660年、北原・大倉1983p.189)

- (14) ▲いなか者 はあ。こりや。仕合で御さる。してこなたは。どのながれて御ざるぞ  
▲ふつし されは。うんけい。たんけい。あんなみと。いふておちやる。それかし  
はあんなみでおちやる (同, 巻第三 32 ウ, 北原・大倉 1983p.285)
- (15) ▲大名 して。これははや。ゑぼしが。おそふくるな▲藤六 さればおそふ。御ざり  
まする (同, 巻第一 2 ウ, 北原・大倉 1983p.104)

以上, 室町期以降には対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が増加し, 江戸期には僅かだが単独使用の例も見られた。

#### 4. おわりに

本発表では, サレバの対人的意味の獲得過程を調査した。サレバの対人的意味は鎌倉期に萌芽が見え, 室町期以降に対人的意味を表すサレバの特徴に合致する例が増加し, 江戸期には僅かだが単独使用も見ることがわかった。順接確定条件を表したサレバがなぜこのような変化を遂げたのか, 変化の理由を明らかにすることが今後の課題である。

また, 対人的意味を表すサレバは「相手の疑問に応じたり相手に同意したりすることで, その話題を受け入れていることを相手に知らせる働き」を持つと考えられる。このサレバは相手の発話に応じる点で応答表現であると言えるが, 相手が提示した命題を「そうだ, その通りである」と肯定するタイプの応答表現とは働きが異なる (たとえば疑問詞疑問文に応じるサレバを「そうだ」と解釈することはできない)。相手の発話を肯定する応答表現には「いかに」「なかなか」等の副詞由来のもの他, サレバと同様指示詞を含む「さよう」「そう」等もある。このような表現とは異なる種類の応答を表す上でなぜ接続詞であるサレバが採用されたのだろうか。このような点も明らかにしていくことで, 副詞や接続詞を含めた副用語が対人的意味を獲得する背景や条件を明らかにしたい。

【使用テキスト】※以下, 下線は「国立国語研究所(2024)『日本語歴史コーパス』(中納言 2.7.2 データバージョン 2024.03) <https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/> (2024年5月14日確認)」【平安】竹取物語, 伊勢物語, 土佐日記, 大和物語, 平中物語, 蜻蛉日記, 落窪物語, 枕草子, 源氏物語, 讃岐典侍日記, 大鏡…新編日本古典文学全集 (以下, ○)【鎌倉】方丈記, 住吉物語, 宇治拾遺物語, 保元物語, 建礼門院右京大夫集, 平治物語, 十訓抄, 平家物語, 十六夜日記, とはずがたり, 徒然草…○【室町】義経記…○, 天草版平家物語, 天草版伊曾保物語…大英図書館蔵本, 虎明本狂言…大塚光信 2006『大蔵虎明能狂言集翻刻注解』清文堂出版【江戸】狂言記…北原保雄・大倉浩(1983)『狂言記の研究』勉誠社, かなめいし, 一休ばなし, 浮世物語…○

【引用・参考文献】林禎映(2018)「中・近世日本語における副詞の感動詞化: 応答型感動詞用法を例にして」『日本言語文化』43./岡崎友子(2015)「『カレバ・サレバ』の歴史的用法と変化について」『文学論藻 東洋大学文学部紀要 日本文学文化篇』89./川瀬卓(2019)「感謝・謝罪に見られる配慮表現「どうも」の成立」『近代語研究』21./同(2024)「副詞「どうぞ」の歴史変化: 変化の語用論的要因に注目して」『日本語文法』24-1./川村祐斗(2021)「接続表現サヨウナラ(バ)の“別れの挨拶語”化」『Nagoya Linguistics』15./同(2024)「サラバの史的展開: サレバ・未然形バとの対照」『日本語の研究』20-1./日本国語大辞典第二版編集委員会(2000-2002)『日本国語大辞典第二版』小学館./津津周太(2018a)「近世における副詞「なんと」の働きかけ用法: 感動詞化の観点から」『形式語研究の現在』和泉書院./同(2018b)「副詞「ちょっと」の感動詞化: 行為指示文脈における用法を契機として」『歴史語用論の方法』ひつじ書房。